郷の集い

発行
新郷校愛護会文芸部
編集責任者
小西　誠

新任御挨拶

校長　西川八太郎

不肖私、今春の定期異動に際し、図らずも、美しい伝統と尸史に輝く当小学校に奉職することになりました。

当校は平屋建てで新しく、而も県下に三、三しかない温い良い校下があることは、私の最も光栄とし喜びにたえないところであります。これ全く、教育第一主義に徹した綜努力の賜に外ならないと信じ、万腔の敬意と感謝を捧げる次第であります。

この上は、新郷校教育推進のため西新郷全村学校進展のため、駑馬に鞭ち出来る限りの奉公をさせて頂きたいと存じております。町当局、農協は勿論校下の皆々様の心からなる御支援御協力御指導を賜りますよう伏してお願い申上げます。

御挨拶

副会長　村田勘治

一言御挨拶申し上げます。

つきましては不肖な私のような者が前副会長のあとをおって副会長の名をお受けしたことは私の身にあまる所がございますが、私の尊敬する青木会長や役員の方々、又会員皆様の御支援をお受けしてこの一年を過したいと思っております。

私のお願いとしては青木会長を重の軸として新郷校の愛護会を郡下にもなく又福井県にもないより一層の愛護会になるようにと共々努力したいと思っております。幸にも本年の目標として父親学級準備委員会をもうけ、委員長に前副会長になって頂き県下にもない母親学級と共に父親学級の育成に専念したいという会長の念願であり、私も微力ながら会長と共に、より一層の尽力に邁進したいと思っております。

更に本年度は準会員の協力委員会を加えて各委員会も独立して仕事ができるよう、役員をふやして男女委員を配分し、愛護会の機構を一新しました。

何分不肖の身でございますので、役員のお方や会員の皆々様、会長の車の軸がよりよく、より軽快に運転できますように御協力と御支援をお願い申し上げます。

先ずは紙上をかりて御挨拶申し上げます。

論説　新郷愛護会の進むべき道

戦後、進駐軍の肝煎りで誕生したPTAも十有余年をむかえて、ようやく一つの転換の期にさしかかっている。PTA本来のあり方と異なって、今までのPTA運動が、ややもすると児童の福祉という狭義の解釈にとらわれ、学校に対する援助団体の如く考えられがちであったのはいかんである。それらも完全なる援護団体化すればよいのだが、中途半端な行動が「PTAとは金のかかるものである」といった一般会員の不満の声となったのであろう。こういった疑問が全国化したのが昭和三十二年九月東京博物館において行なわれた「全国PTA指導者講習会」においてであった。

PTA運動はあくまで児童の環境浄化を目的とする社会教育団体の一環としての教育団体であることを忘れてはならない。

こう書いてきた前文が本校愛護会の姿をのべたものでないことは勿論だが、ようやく本郡において昨年「PTAが行なう成人教育」のテーマのもとにPTA研修会をひらき本来の目的が確認された。そしてその中で本校の母親学級がこの姿を反映する先進団体として注目された。

我々は本年度の出発にあたって、更に愛護会の内容を整え、父親学級の開講を試み、研修旅行、文芸委員の勉強会など、一歩前進を願って地道な集いを企画した。

我々は、PとTが互いに手をとり合い、児童の福祉増進と民主教育の振興をはかると共に会員の教養をたかめ、相互の親睦を厚くすることをめざして歩むものである。（広部）

父親学級の発足にあたり

委員長　山本久四郎

県下に名だたる母親学級をかかえた私たちの愛護会に、併行して父親学級をもちたいという声は、今までにもボツボツ話されたことがありました。それが昨年の研修会の契機として具体化し、町当局の支援と会長の熱意によって実現のはこびとなったことはまことに喜びにたえないことです。

近年になって父親学級をもちたいという機運が全校下にあったことは本当だと思います。例えば次のような事実があります。今年PTAの役員を頼かに行ったところ、父親が断るそばで母親が「たまに学校に行って勉強をせなあかんのや」と口をはさんでいたほほえましい姿、他のPTAでは逆に父親の役員受諾を母親がさえぎるのが普通です。

私自身もまずしい身体をひっさげて昨年まで二ケ年、色々と学校へ寄せて頂いたり、他の研究会にお邪魔して本当によかったな、今の教育の姿を少しでも学べて倖せだったと喜んでおります。

何もわからないから子供のことは母親にまかせるのでなく、肩を並べるところまで進んで、両親の話し合いで母親の子供に対するしつけを見て行きたいと思うのが私の願いです。

最初から大きく企画しても実現不可能ですから、少しずつ学校に集って話し合うことから始めたいと思っております。

よろしく御協力をお願い申し上げます。

町政について（概要）

芝原町総務課長の話から

政治には官治（中央集権）と自治（地方分権）とがある。戦前は官治であったが戦後は自治に変った。議員等を選出する場合、自分との関係や情実などにこだわってはいけない。世界をながめてみると官治数ケ国、自治数十ケ国である。政治の組織（行政機関）

議決―議会（町村の条例をつくる）

（予算をきめる）執行―町長、教育委員、選挙管理委員、農業委員とする。

町方用の事業に対して、議員五十万円、町二十五万円、地区二十五万円とする。議員の定員は二十四名とする。会議は年四回（定例会）とする。臨時会の場合は町長が召集する。議会が単独でひらく場合は議長が召集する。役場について、町長―助役（町長が選ぶ）任期四年、支出命令等をする。収入と、支出が同じでなければならない。

（文責　池田）

御挨拶

副会長　西正喜代子

風薫る、若葉五月の候となり会員の皆様には何かと多忙の毎日を送って居られることと思います。

今回不肖、私が皆様の御推せんに依りましてPTA副会長の未席をけがす事となりました。始めての事とて勝手も解らずどうしてよいのやらその方法も考え至らぬ現在の私でございますので会員諸賢の御援助と御助力を切に御願い致したいと思っております。今後精一杯勉強を致し皆様の御期待の万分の一なりとも満足の行く様努力致す覚悟でおりますのでどうぞ宜しく申上げ御挨拶にかえる次第であります。

三五、五、三〇記

パキスタンの小学校

高戸甚右エ門

パキスタンは一般に産業文化の程度が低く文盲が多い国で読み書きできる人は総人口の一八%位です。独立後政府は教育の発展に力を入れてはいるが義務教育が徹底しておらず無料義務教育を行なうためスエーデンの援助で方々に学校を建てています。

パキスタンの学校は小学校五年、中学校五年、カレッヂ四年、大学三年となっており何れも官公私立の別があります。今、田舎の小学校を眺めてみると土塀で囲まれた一反歩程の土地の側にレンガ造りの教室が一つあり中には黒板一つと椅子が二、三個あるだけでたいていの授業は屋外で行われます。生徒は附近の部落から集まるもので男の先生が約四十名、女が六、七名で男の先生が二人おり生徒は拡げられた莚の上に学年別に座って授業を受けますが女生徒は一つのむしろに集まって座ります。簡単な算数の外は殆んど読み書きで生徒は持って来た厚さ八ミリ位の板に習った字を書きますが墨はススキの軸を切ってつくったもので墨壺につけては書きます。板の裏まで書くとこれに白ペンキをぬって乾かしては又使います。石板と石墨をもってきて書く場合もあり昔の寺小屋のこころが想像されます。その点日本の明治政府が教育に力を注いだため日本人の教育程度がどこの国よりも高く、いろんな産業が発展するもとになっていることはじつに有難いことです。

お母さん方へ

おかあさん

今井富貴子

ろろせきで、おかあさんおかあさん
おかあさんと　かいた
かぜが　さらりと　おかあさんに
ふいた
おはなしを　している　おともだち
が　ふみそろにした。
「ふんだら　あかん」と　ぎゅっと
にらんだ。
みんなは　じっと見て　足を　ひっ
こめた。

これは、ある児童詩集の中にのっていたもので三年生の女の子の作品だそうです。この詩をよむとその女の子のやさしい情愛に満ちた心が自にじーんとくるものがあります。どうしてこんな豊かな心情あふれた詩が生れるのだろう。きっとお母さんがいいおかあさんだからではないでしょうか、お母さんの女の子に対する情愛がその詩を作らせた原因ではないかと思われます。おかあさんの暖い愛に包まれて育った子供のそこから出て来たものは、当然お母さんのいぶきのかかった美しいものが生れてくるはずです。おかあさんとその子供のいのちとのふれ合いがやわらかくしっとりとした完全なものがその詩の中から匂ってくるようです。このお母さんはだからといって一日中二十四時間つきっきりで、子供の世話をしているわけでもないでしょう。時には忙がしくて子供にかまっていられない程の時間だってあるはずです。

ある時、子供たちに「お母さんとどんなお話をする？」と聞いてみると「なあもせんのや、おっかちゃんら、だまってるし、しゃべると、やかましいって叱るンにゃも」との返事が意外に多くてびっくりしました。いつだったか雑誌の中にこんなことがありました。農村家庭で、ある心理学者が一日のうちでどれだけしゃべるものかを内密でこっそり録音器にかけて調べてみたそうです。その結果親と子がことばを交わした時間はなんと「四分五十秒」しかも、ほとんど「こごと」に使われていたということです。生活があわただしくなってくるに従って、人と人とのふれ合いはますます多くなってきますが、そうであればある程、「ふれ合い」の仕方が粗末になってきます。現在では、都会は勿論どこの家庭でもこの「四分五秒」の現象はみられるのではないかと思います。

要はこの「四分五秒」を如何にうまく使うかに問題がかかっているようです。「おかあさん」の詩に見られたような、心にしみいるような心情にまで高められた心と心のふれ合いで「四分十秒」を、毎日一くつづけていったら子どもは　どんなに　心あたたまるやさしい美しいものを愛する子供になっていくことでしょう。

母親学級

俳句クラブ作品

章子
版一夜夢路をみだす鵜の声かな

喜代子
菜種刈り朝露ふんでもんぺゆらす

ニシゲ
植えおえし田園に立ちて合掌す

照香
裏庭の鶯の声幼なごと

芳子
腰痛を帰途に忘れる菖田みて

千代江
幾重つぐ春の野良着針通らず

百合子
菜の花や牛ひく人の肩にあり

圭一
長々と山重行く軒や古き町

奉安殿

MK生

新郷校に奉安殿が建ったのはたしか昭和八年頃だと思う。僕がまだ小学校に入学して間もない頃だったので、地鎮祭等の様子がかすかに記憶に残っている。それまでは　今の教員室の西側廊下の上に御真影がおかれてあって登校、下校の際は必ず校門の処でその方向に向って帽子をとって最敬礼をしたものである。奉安殿ができてからはその廻りに植込みも出来　前は玉砂利をしきつめきれいな芝生も植えられて全く学校の中心として最も厳粛な場となったようで、生徒誰もがその前に立つと厳粛な気持で頭をさげたものである。そのことは上級の学校へ学んでも同様で脱帽して最敬礼の代りに挙手の礼を教生間何のふしぎを感ずることもなく過したと思う。又国祭祝日には両陛下の御真影を前にして教育勅語を読まれる校長先生の態度は一番緊張されたもので、全生徒は頭を垂れて拝聴したものである。当時の噂ごとしとしてきいたものに「学校に大火があって御真影を守るために火の中に飛込んでこれを運んだ為にその先生が大怪我をしたとか、式典に於て教育勅語を読み誤えて首になった」とかの話があった。

とにかく　我々の学生時代は一貫して天皇の尊厳と教育勅語は至上のものとして全身全霊にたたき込まれたし、軍隊に入ってからはこれが軍旗と軍人勅語におきかえられた　いわば、当時の全国民が、このことを以って一本の車軸で結ばれていたといってよい。

広島、長崎に落された原爆は多くの人命と共にこの車軸をもガラくと打砕いてしまった。原爆はまことに偉大な力を発揮したものである。